

植込の葉蔭に明るい電燈が照つて、或齒科醫の二階に、歌留多をとる讀み聲やどよめきが聞えた。

僕の家は海ばたにある。

僕の左脇に女はビタリ寄りそつて歩るいた。

F 洋品店の前の四つ角で、三四人連れ 町の青年に逢つた。

僕は相變らず木刀を打ち立てた。

先の上衣のボタンを外してゐた男が、今度は水兵の服と帽子を着て、港町の海岸通りに現はれた。そして姿を掻き消した。

帆柱や傳馬船が複雑してゆれてゐる。

杉の木の大きい鳥井のねさまで来て、女は歸ると言ひ出した。

僕は舗石を踏んで、女を無理矢理に正面の拜殿のねさまで歩るかせた。

『もう遅いから一人では淋しいだろうから、上つて休まう』と言つたのだ。

肩に掛けた布團と木刀を椽の上へ置いて、